

時代の風 長谷川真理子

総合研究大学院大学長

ものの由来を知ることが大切な。それは面白いだけでなく、当たり前だと思っ
ている現状を、異なる観点から見直すきっかけを与えてくれる。

たとえば、哺乳類の中耳には「つち骨」「あぶみ骨」「きぬた骨」という三つの小さな骨があり、それらが鼓膜に連動して音を聞く役目を果たしている。この仕掛けは絶妙であり、耳が聴覚のための装置であることは自明だ。ところが、中耳の由来を見ると、それは魚が陸に上がった後になって、空気を伝わってくる振動を音としてとらえるようになってからできたものであり、中耳の三つの骨は、実は顎の骨の一部からできてきたのである。

さて、大学という社会装置である。昨今は大学改革

大学という社会装置

の一層の促進ということが叫ばれており、国立大学法人は①世界のトップを目指す大学②特定の分野で活躍する大学③地域貢献を果たす大学、の三つから一つを選び、それぞれの目標達成のための計画を立てねばならない。現在の日本の状況にかんがみて、大学が変革しなければならぬ部分は確かにある。世界的な一流

あまり共有されないまま、現在の大学改革の議論が進められているように思う。19世紀後半から20世紀にかけて作られた世界の諸大学は、確かに、国家の発展に資する人材養成と技術開発を目的に作られた。日本の大学もそうである。しか

など、12世紀のヨーロッパにまでさかのぼる。碩学と呼ばれる人物のまわりに若者たちが集まり、教えを請うとともに互いに議論をする場、というのが大学の始まりであった。学生が教授を雇う。ラテン語を使うので、それぞれの出身地の言語とは関係がない。学生はヨーロッパ中から集まってくるので、大学

がさき土地の法律がない——などなとは最初から国際であり、大学独自の要求し、多くの間にそれらを獲得し、その後、ルネサ

始まりは知への欲求

大学であっても、社会の新たな潮流に適合するために、日々、改革に取り組んでいるのも事実である。

しかし私は、大学という社会装置がそもそもどのような由来でできたものであり、それが続いてきた理由は何なのかについての根本的な認識が、日本の社会に



二丸山博撮影

る大学が続々とケンブリッジ大学ツツは、そのよによって設立されたとんとである。王侯貴族の意向な運営を強いられあつたが、大学は自治を守り続け、20世紀ア